ゾウのストレス解消探る

帝京科学大アニマルサイエンス学科の学生は、甲府市立動物園が飼育するアジアゾウ「テル」の行動観察チームをつくった。テルは幼少期からストレスが原因とみられる行動をすることから、テルの様子を定期的に観察。収集したデータを分析し、効果的なストレス解消法を探る。

市立動物園 帝京科学大生が研究チーム

行動観察、データ収集

アジアゾウ「テル」の行動を観察する帝京科学大の学生＝甲府市立動物園

テルは雌の39歳。1980年にもう1頭の雌「ミミ」と一緒に同園にやって来た。園によると、当時からテルは頭を左右に振り一定のリズムで体を揺らす「常同行動」をしており、ストレスが原因と考えられるという。

観察チームは11月上旬に発足し、同大並木美砂子教授の研究室に所属する3年生9人で構成。3月に同大と同園が締結した連携協定に基づいて、研究を進めている。

観察では、常同行動のほか「耳をパタパタさせる」「水を飲む」といった約20種類の行動の有無を1分ごとに記録。週に1回程度、数年間かけてデータを集め、常同行動が出現しやすい時期を調べる。ストレス解消のため同園が行っているササや青竹をあげる取り組みの効果も検証する。

30日は、学生9人と並木教授が同園で初めて観察をした。2人一組に分かれ、約3時間かけてテルの行動を記録した。同大の中村駿太さん(20)は「今後は協力者を募りながら観察を進め、テルが豊かな生活を送るために何が必要なのかを考える一助にしたい」と話した。

観察結果は今後、同園にも提供される。秋山多江獣医師は「砂の提供やテルに餌を探してもらうような工夫など、研究と連動して新しいストレス解消法も検討していきたい」と話している。

2017/12/1　山梨日日新聞